

C-20 和服構成の諸要因 (其2) 交織地単衣長着の縫い目強度と着装による変化
大妻女子大学家政 木野内清子 金谷善子 O笹本信子 吞山委佐子

目的 和服は離体部の多い ゆるやかな衣服とされているが、実際には、腰部においてほとんどゆるみのない状態で巻きつけ、更にすそすばまりのシルエットに形づけすそを斜めに引き上げて着装するため、動作による布自体の変形や各縫い目への影響を 数値的なデータから検討するため本実験を試みた。

方法 実験着はウール65%、ポリエステル35%の着尺地の単衣長着3枚を、ほぼ同体型の被験者3名の寸法に合わせ、縫い方3種類を設定して製作し、下半身に背を中心にして縫、横 5センチ間隔にしるしをほどこし、30時間あて交換して90時間着用した着用前後の寸法を計測し、①布の伸縮状態・変形 ②その基礎となる縫い目強度を比較検討した。

結果 ①については、幅寸法は腰部においてやや伸びがみられたが、その他は僅少の変化にとどまり、腰部の変形は、背が手縫い2度縫いの実験着に顕著にあらわれた。たけ寸法は、最大4ミリ強の伸びと、最少6ミリ弱の縮みがみられた。特に右身ごろ(下前)においては3実験着とも 下半身全体に寸法の減少がみられ、前を斜めに引き上げて着装するための、ひっぱり影響があらわれている。②について背縫いは、ミシン2度縫い>背伏せ布つけ>手縫い2度縫い。わき縫いは、ミシン割り縫い>手縫い2度縫い>手縫い割り縫い。おくみつけは、ミシン縫い>手縫い である。寸法の伸縮、変形は90時間程度では余り変化はなく、その少ない変化かうも、ミシン縫いは強度が大で布地への影響が多く、手縫いは強度が小であるため布地の影響が少ない。